

今月の



隣に伝えたい

新たな言葉と概念

【ベナー看護論】

英 Benner. Patricia : 「From Novice to Expert-Excellence and Power in Clinical Nursing Practice」

〈解説〉

パトリシア・ベナーはカリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部で教授として研究に従事。経験豊かな看護師であり、社会学者、人文学研究者でもある。

「ベナー看護論」は1984年にアメリカで出版され、1992年に井部俊子らの翻訳で「ベナー看護論：達人ナースの卓越性とパワー」として日本に紹介された。その後、2005年の新訳本では「ベナー看護論：初心者から達人へ」とタイトルが変更されている。この看護論の特徴は、初心者、新人、一人前、中堅および達人という5段階の成長をなす看護師の観察やインタビューから得られた実践例から、帰納的に看護理論を形成したところにある。これらの実践例から看護師の能力を看護実践の7つの領域（①援助役割②指導③診断機能とモニタリング機能④急速に変化する状況における効果的な管理⑤治療的介入と療法を施行し、モニターする⑥質の高いヘルスケア実践をモニターし、保証する⑦組織化の能力と仕事役割能力）として抽出している。この本が紹介された当時の日本では診療の補助業務は看護業務ではないという批判がある中、ベナーは診療の補助業務は看護師の重要な役割であると説いている。これらの領域は現代看護のあるべき姿であり、臨床看護師の能力であるとしている。また、臨床で実践している看護師たちを観察しインタビューすることで、彼らが確かに臨床知というものを身につけていることを見出した。実践から派生したベナー看護論は、臨床看護師に力を与え、多くの看護師に優れた看護実践とは何かを教えてくれた看護論である。

（国立精神・神経医療研究センター 看護部 牛島 品子）

本誌341p に記載